

ある職員の体験

自分が好きな「ギター」を弾くことで、地域社会にほんの少しでいいから貢献しようと決めて、年に数回、福祉施設や各地域のイベント会場で「ギターの弾き語り」をする活動を、十数年間続けています。

集まってくださる人々は、その会場によって、高齢の方や子どもたち、障がいのある人などその時によっていろいろで、演奏中に曲のリクエストをいただくことや、演奏終了後、「楽しかったよ」と声を掛けていただくこともあります。「音楽」には、さまざまな悩み、つらさを抱えている人々が、ひとときそのつらさを忘れて、人々の心を結び付けたりする力があるのではないかと思います。

そして、何よりも、これから生きていく「元気」、悩みを乗り越える「勇気」を与えてくれることを、演奏しながら実感しています。

以前、演奏中にハプニングがあったことに気がつかないまま「弾き語り」を終えました。演奏終了後、一人のご年配の女性が「とてもうれしかったです。」と感想を伝えて、帰られました。その後、機材を片付けていたとき、演奏の途中で、ギターとスピーカーをつなぐコードが外れていることが判りました。

その時、私は「はっ」と気付かされました。演奏後、声をかけてくださった女性を始め、皆さんが、ハプニングが無かったかのように最後まで聴いてくださった「気遣い」に、人のあたたかい思いやりを感じました。「弾き語り」のボランティアをすることで、伝わってくる「人のあたたかみ」に、自分自身が人として、成長させていただいている気がしています。

宇陀市人権啓発活動推進本部

2014.4

